PHAYAO レポート 2015-01（Field Work 徳島大学）

徳島大学、現地大学 CRRU（2015.8/19～28）

―汚いイメージをクリーンなエコに変える―

徳島大学　総合科学部人間文化学科　２年　重富はるか

はじめに

今回８月２１日～２７日の七日間、シャンティ山口の活動の一環であるスタディーツアーに参加した。ツアーの中で中高生のための学生寮訪問と山岳民族であるモン族が暮らしているホイプム村の家庭にホームステイした。

エコトイレについて

シャンティ山口は、村の家庭と保育園へのトイレ普及に取り組んでいる。それもただのトイレではなく、し尿を何度もろ過することによって飲料可能な水に変えてしまうトイレである。この水はタイ政府の水質検査で飲料可能の結果も認められた。また、溜まった排泄物をメタンガスに変換することもできる。（写真①）

写真①

ここでは保育園のトイレについて説明する。まず大きな緑色のタンクにし尿などを集める。（写真②の手前）そして次のタンクに移動する。ここで、排泄物の軽い物は、上に浮き、下には重たいものがたまるので中でも固形物の一番少ない真ん中あたりの水を抽出していく。この過程を何度か経て、畑へ水が流れる仕組みとなっている。ろ過が行われるタンクのうえには植物が置かれており、植木鉢内の土壌の隙間から微生物やタンク内部の空気の出入りのフィルターの役目もしている。

写真②

トイレ＝汚いイメージという固定概念があったが、トイレからもクリーンなものが作れるという新しい発見であった。

考えたこと

生活援助と聞いたら真っ先に物資援助が思いつくが、それが必ずしも相手が求めていることではない可能性があるということに気づかされられた。相手の立場で行動をしなければならない、と。シャンティ山口は、トイレが故障したときに住民の人達自身でトイレの修理ができるように現地で入手できる資材でトイレを住民と一緒に設置している。

支援先の人が笑顔で健康にずっと暮らせるような活動でないとそれはただの自己満足で終わってしまうと強く感じた。私達の幸せのベクトルは必ずしも世界共通ではない。相手の立場にたって行動する、という根本的なことを強く感じたスタディツアーであった。

― 重富はるか ―

「遺伝子組み換え作物からみる難民とグローバル化の関係」

徳島大学　医学部栄養学科　3 年　篠原理沙

◎はじめに

長い山道を超えてホイプム村に入ってきて最初に目にした看板は遺伝子組み換え作物。

ビジネスで世界を席巻する A 社の遺伝子組み換えトウモロコシの色鮮やかな看板であった。

ホームステイ先に遊びに来ていた子供が読んでいたのは絵本ではなく、A 社の遺伝子組み換えトウモロコシのカタログであった。私はホイプム村で遺伝子組み換えトウモロコシを見るたびにどきりとした。なぜなら、遺伝子組み換えトウモロコシが村の人たちにお金を一時的にもたらした代わりに、健康、土地とそれまでに足りていた暮らしを奪ったことを知っていたから。遺伝子組み換え作物の種子を独占販売するとある大企業はホイプム村だけではなく世界で弱い立場にいる人々から搾取を続けているようである。

◎モン族が今の土地に住んできた歴史。

モン族の一部は、ベトナム戦争で米軍側につき、共産勢力と戦った人たちが、戦争終結後ラオスでの政治的迫害をおそれて、タイの難民キャンプへ収容された人や、国境沿いの山岳地に逃れたひとがほとんどである。タイ政府は、ゲリラ化や反政府活動を恐れ違法侵入者に対し、準備した土地への定住作戦をとり、双方多くの犠牲者をだした。これに応じ、国籍登録ができた人たちは、タイ社会で暮らすこととなった。定住化に応じたものの耕作地が無く職にもありつけない少数の人たちは、生活苦から耕作地のある元の山へと戻っていった。ところが自給自足がかろうじてできた狭い耕作地のため現金収入はなく子弟の教育もできず苦しい生活を余儀なく過ごしていた。近年現金収入をもたらす遺伝子組み換えトウモロコシの話が飛び込み、村人こぞって森林違法伐採を始め、トウモロコシ栽培に専念した。栽培を 4，5 年継続した頃から村に異変が生じ始めた。（異常洪水・健康障害・収穫不良）

◎遺伝子組み換えトウモロコシ栽培に関しての問題点。

◆モン族はお金が必要であった。

〇子供に教育を受けさせるために。国籍を取得させるために。

ラオスから逃れてきたモン族の人が国籍を得るためには、最低 6 年間以上タイで暮らしている証が必要でそのため中学、高校を卒業していれば、国籍取得の資格要件が発生する。タイで中学、高校を卒業するにはそれなりにお金が必要である。また、無国籍では、移動、医療等、社会的な権利等がない。

〇トウモロコシを育て始めるとお金がかかった。

A 社の遺伝子組み換えトウモロコシは、育てるために独占販売している種子、肥料、除草剤の 3 点セットが必要である。植物を育てる際に消費する肥料や除草剤はもちろん、種子も毎年購入する必要があった。また、遺伝子組み換え作物を知的財産であると主張しそれが認められているために特許使用料を毎年払う必要もある。

〇遺伝子組み換え作物で便利になった暮らしを手放すことは容易ではなかった。

◆ホイプム村人たちは、遺伝子組み換え作物栽培と強い除草剤の害を知らなかった。

・売り込みにあっては、遺伝子組み換え作物を収量が増える、除草の手間が省けるなどの謳い文句で販売していて、危険性が極めて高いだけに取り扱い説明は、袋や容器にタイ語で表示を行っているが、文字が読めない民族にとっては、理解できず全く無防備で素手で取扱たり、防毒マスクも付けず作

業を行っていた。

◆ホイプム村の人たちが使っている土地は、タイ国のもので、村人のものでなく、タイ政府が村人に対してエリアを限定し、使用権のみを許可している土地であった。

◎シャンティ山口の支援で印象に残ったこと

◆自立と持続可能な支援を重視している。支援が必要になったときに必要な量の支援をしている。

・シャンティ山口の支援では後々は日本からの支援がなくても、そこで生きる人々の力のみで問題を乗り越えて生活を営めるようになることを重視している。そのために支援をする際、お金や物を与えるだけや知識の押し付けをするのではなく、支援を受ける人が自ら学んだり、作業をしたり、リーダーとなり村の人々に知識を広めたりするといった　プロセスをふめるような支援をしていた。

・遺伝子組み換えトウモロコシに代わる作物を育てる際には、これを植えなさいと苗を村の人々に植えさせるのではなく、試験場で植えていた作物で村の人が育ててみたいと興味を持った作物の種を分けて、その作物について村の人が自主的に育て方を勉強するようになっていた。また、苗ではなく種を分けるというのは自分の育てた作物に愛着を持ってもらうことを目的としている。こうした支援は、換金作物が増えて村の人々の暮らしを金銭的な意味で豊かにしていくということでもあるが、作物を育てる際に自分で学ぶことや教えあうことを知ることで精神的にも充実すること、さらに試行錯誤したり村人の間で相談したりすることで村の中でのネットワークが大きく、強くなって自分達でよりよく生きていくために問題を解決できる村の体制ができることにも繋がる。

・村の人々が遺伝子組み換え作物の危険性を認知し始めたのは除草剤による健康被害が生じてきてからである。村の人々の間で遺伝子組み換え作物やその除草剤が問題であるという認識や解決しなければならない問題であるという意識が芽生えてきた際にシャンティ山口は支援を行った。その支援は除草剤や遺伝子組み換え作物の危険性について教えることや換金作物への転換といった村の中だけではどうしても出てこないけれど必要な知識やアイデアである。また、この知識やアイデアが受け入れられるようになる前の関係づくりや村人間で問題意識が共有できる関係づくりを行ってきたことも支援のための下地である。

・支援の成果として 200 ヘクタールもあった遺伝子組み換えとうもろこしの土地が 100 ヘクタールと半分ほどに減少したことに加え、村人たちが自分自身の力でこれからはやっていけると判断したために支援は手を引くということを伺った。本当に必要な量の支援を行い、自立を願っていることを非常に強く感じた。

◎最後に

・グローバル化は富める者はさらに富を得て、貧しいものはさらに貧しくなるシステムである。世界で立場の弱い状況下にいる人々が真っ先に搾取のターゲットとなる。　遺伝子組み換え作物で荒らされた土地と除草剤によって奪われた人々の健康は帰ってこないが、シャンティ山口の自立可能な支援によって自ら学んできたモン族の人々は、いつかはモン族の人々自身の力で持続可能な未来を切り開いていくだろうと。この村やシャンティ山口の支援のスタイルを見て確信している。

— 篠原理沙 —

『シャンティ山口　活動現場　訪問レポート』

徳島大学　医学部医学科　1 年　福本和生

八月のお盆明けから九月に入る手前まで私はスタディーツアーに参加し、タイの大学、保育園、寮、村を見て回った。奥地に入るにつれ少なくなっていく近代設備の数々。全てがオート化、最適化され、人が快適に過ごせられるようにと変化を遂げていった冷蔵庫やトイレ、シャワーなどで囲まれた現代の生活とはちがって、決して楽ではなかったけれど、息苦しくない、ある意味では人間らしい八日間の生活。歴史の教科書にでも載っているのでは、と思えるような道具に周りを囲まれてホームシックにかかる間もなく全力で毎日を送れた。

この旅で私が学んだことは大きく分けて二つ。一つは〈ロ―テクは世界を救う〉ということ。もう一つは〈すべては絆作りから〉ということ。

最初に訪問した CRR 大学で、私はタイの伝統医学部の方々と交流し、薬草やマッサージなどおよそ今やっている西洋医学では取り扱わないものに触れた。伝統医学の根幹にあるのは「病気の原因をおさえる」こと。患者さんの身近な日常に寄り添い、人と人との触れ合いを通してのコミュニケーションがごく普通に行われる。病気になったから病院に行って治療を行ってもらう、のではなく、まず病気にかからないようにするにはどうすればよいのか、を考える。顔を見ないで診察する医者が増えた。薬だけで解決できない問題も現実に多くある。今の日本で大きなパーセンテージを占める生活習慣病やうつ薬だけではどうにもならなくなったときには、ハイテクのみの治療に頼るのではなく、ローテクを考慮してみることも大事なように思えた。

そして、佐伯さんに連れて行ってもらった保育園で初めてエコトイレを見たが、これは尋常でなく私に衝撃を与えた。エコトイレとはエネルギーを一切使わず、洗い流すのに使用した水から排泄物まですべてを無駄にすることなく再利用する仕組みを持つトイレのことで、最終的には一度使った水がまた飲めるようになるまでになる。流れとしては、排泄物がまず無酸素状態の第一槽に一定期間ためられ、自然発酵。これは嫌気発酵なので、好気細菌である大腸菌や病原菌は死滅される。そして死がいやその他のごみは分解されるまでタンクの下に溜まり、液状化した上部の少し濾過されたところを管が第二槽に流す。それ以降で微生物が排泄物中の有機物を食べ、さらに分解させる。エコトイレでだされる水は窒素やリンを含んでいる養分の高い水であるので畑におくって再利用される。また第一槽で発生したメタンガスも調理などに使うガスとして使われている。もし徳島市にエコトイレを導入するとどうなるか、現実的には不可能であるがそれを可能と仮定すると素晴らしい答えが出てくる。まず汚水環末整備問題がなくなる。無酸素状態プラス微生物の分解が働くからだ。そして、汚泥焼却による温暖化問題。これもなくなり、農作物の肥料となってリサイクルされることになる。マンホールの撤去。これで洪水日に突然できた穴に片足がはまることもない。使用する水の量も劇的に削減されるだろう。また固定されたタンクから一定量流すのではなく、雨水やその他どこからでも水が調達できるので災害時に混乱することもない。下水道処理に使う予算は年間約 200 万円ちょっと、しかしエコトイレなら最初の開発にお金がかかるだけで後は何もしなくても済む。金銭的にもエコトイレがどれだけエコなことか。実際ホイプム村の人たちはエコトイレのおかげで衛生的な面でも非常に生活が楽になったといっていた。穴を掘り、

糞尿をためるだけのトイレでは雨期になると糞尿が外にあふれ出てしまう。村では伝染病が流行っていたがその発生源の一つに不衛生なトイレがあると考えそれを改善するためにエコトイレは作られた。しかし日本でこの夢のような設備は使えない。単位当たりの人口が多すぎるし、畑が少なくビル群が密集しているところではせっかくの水の循環もイマイチ働かない。地震が起こりやすいというのもあるが、何よりお金が入らない。エコトイレがなんの介護も必要としない分、回るはずだったお金が回らなくなってしまうのだ。シャンティ山口の活動がまるで非の打ちどころがないように見えるのは、今まで大きなミスがないというのもあるだろうが一番大きなポイントは本気で村のことを考えていて、村人とともに生きていることであろう。そのころ佐伯さんは、そういった下水関係の知識はまるっきり皆無だったらしいが、村に必要と分かるや否や本を読み漁りその技術を会得したらしい。私はエコトイレの話を聞き、これが徳島に設置されればどれほど生活が改善されるだろうかと考えてみたがそれは少しお門違いだと気づいた。佐伯さんたちが考えたのはあくまでホイプム村でのエコトイレであって徳島のエコトイレではない。私が今後徳島で暮らしていくのだとすれば、私自身が徳島のことを本気で考えて練りだしたものでないと失敗するように思えた。日本のトイレは、近づけば扉が開き、座る便座は適温にまで温められ用を足せば自動で適量の水が流れてくる。技術の粋を極めた素晴らしいトイレだと思う。だがこの快適さ便利さがより多くの財産、地球の資源、物を大切にする心など色々大きな見落としにつながっているのかもしれない。見た目の派手さとは裏腹に内部ではその歪みが大きく膨らんできている。それに対する解決策のヒントを佐伯さんから頂けたと思う。

次に二つ目のテーマであるが、まず支援するときに必要なのは何か？それは絆づくりに他ならない。私はツアー前にはホイプム村の人たちともジェスチャーを介せば意思伝達はさほど困難なものではないと思っていた。だが、まるっきり初対面の時私は村の人と会話どころかジェスチャーですら意思疎通できなかった。三日間にわたるホイプム村の人たちとの交流で私が何かできたことは少なく、スタディーツアー前に先生に言われた、君たちが何をするかなんて期待していない、という言葉が胸に刺さった。だが、収穫がないわけでもない。その手掛かりとなったのが絆である。三日目になってもやはり会話ができるレベルにはならなかったが表情とそれまでの家族や友達との触れ合い方からだいたい何をしてもらいたいのか分かるようにまでになった。佐伯さんはこの言葉が通じない場所で、村人が今まで考えてもいなかった計画を実行してきたのだから、私よりはるかに強い絆でホイプム村の人たちと結ばれているのだろう。というのは、シャンティ山口の目的がこれまで他のＮＰＯや政府が行ってきた物資提供ではないというところにある。佐伯さんたちが持っていきたかったゴールは村の自立。そのために村の人にはきちんと自分がやっていることへの善し悪しの理解が必要であるし、その方法や子供たちにどう伝えていくかということも教えていかなくてはならない。それは最新の機械やお金を提供するだけではなしえないものである。（実際ある村ではホースとお金だけを渡されたために何の知識もない村の人が各自でホースを設置することになったが、即ホースのつなぎ目などから水があふれ出たりホースの点検が不十分であったりなどで修理が必要となり、お金を払って手伝いの人を呼んで補強することになった。）体験してみて言語が通じない人たちとの交流がいかに難しいことだったかが分かった。そして。自分たちの意見をぶつけて、村の人たちが納得するように伝えるのはさらに難しいことであるとはっきりわかると思う。そこで大事になってくるのが絆の強さであり、信頼度になってくる。今までの物資輸送だけでは絆も何も生まれない。本当の助けとは、その人のできないことを代わりにやってあげることではなく、その人自身ができるようになるまでサポートしてあげることだと教えられた。

エコトイレ

ホームステイ先の家族

最後になりましたが、自らの価値観をひっくり返すような体験を得る機会を与えてくれた先生方、ＮＰＯのみなさん、ホイプム村のみなさん本当にありがとうございました。こんな体験普通に暮らしていたら一度もできなかったと思います。でも、この経験をここで積むことができたのも何かの縁だと思いますので、この先私が職を持って食べていけるようになればぜひとも何かお手伝いさせてください。何も役に立てないとは思いますが、サッカーの相手ぐらいにはなれるように体も鍛えておきますので。少しの間でしたがほんとにお世話になりました。

― 福本和生 ―

ホストファミリーのみなさんとのお別れの時（2015.8.27 ホイプム村）

～ツアーを通じて気付いた現代日本の抱える問題～

徳島大学　医学部医科栄養学科　１年　黒田琴巳

今回、シャンティ山口の活動に参加し、いろんな方々と交流し、生活を共にさせて頂いた。初の海外ということで、日本では見られない光景や文化をたくさん目の当りにしてその新鮮さにツアー中、毎日心が躍っていた。その中でも特にシャンティ寮やホイプム村で滞在させて頂いて一番強く感じたことは、資本主義経済でものが大量生産、大量消費されて物質的に豊かであることが幸せだと思ってはいけないということだ。

シャンティ寮や、ホイプム村の皆さんの生活を拝見させて頂くと、経済的状況も衛生的条件も日本側から見るとあまり恵まれていないにも関わらずたくさんの笑顔が日常にあふれていた。逆に日本ではどうだろう。資本主義経済では常に他社や他人との競争を強いられるため、より多く利益をあげなければ、より高い地位を目指さなければと家庭の経済状況が苦しくないにも関わらず飽くることのないハングリー精神につき動かされて、幼少期から遊ぶ時間も犠牲にしてより多く給料をもらえる職に就くためにと勉強や習い事に没頭させられている。学問は自分の知らなかったことを知っていく喜びが醍醐味であるはずなのに、資本主義社会の競争に打ち勝たせるために周りの大人は成績を求めるから子供たちは学問はやらされるものだ、とばかり感じて楽しめず、やりたいことも我慢して勉強するからどうしても表情も俯いてしまうのかもしれない。ご飯も皆で集まって手作りの料理をゆっくり食べるのではなく、ご飯の時間を少しでも多く学業や仕事の時間につぎこむために加工食品過多になってしまったり孤食をしたりする人も増えてしまっているように感じる。これがまた子供たちにも孤独な時間を増やして表情を俯かせる種の一つかもしれない。

だからといってシャンティ寮やホイプム村の子供たちは追われるものもなくゆったり遊んでのびのびしていられるから笑顔に溢れているというわけではない。寮で生活する子供たちは自分たちで家事もするし、学校にも通って学業も怠らない。でもそれも日本の学生みたいに競争に打ち勝つためにやらされているっていう訳ではなくて目標があってそれを実現したいから、学問に興味があって、やってみたいと思えるから周りの大人に言われるのではなく積極的に頑張れるのだなと感じた。交流会の最後に寮生の子供たちに夢はなんですか、という質問をしてみたところ、医者や歌手、エンジニアなどのような明確な夢を持っていてそれに向かって努力している様が感じ取れた。だから学問や家事が大変でも何かに追われているっていうのとは違って充実さにあふれた笑顔がこぼれるのかなと思った。ホイプム村の私たちと同世代の子供たちも親と同じ時間に起きて炊事や家事、鶏や牛などの世話も手伝っていて、毎日とてもせわしなく働いていた。その中でも、家族や近所の方とのコミュニケーションをあいまあいまに楽しんでいて、周りの大人からたくさんの愛情を注いでもらっているから幸せそうな笑顔が見られるのかなと思った。言語での意思疎通がままならないし、初対面である私たちであったが、どこの家にいっても笑顔で迎え入れてくれ、スキンシップも交えて本当にたくさん愛情を注いでくださった。私がホストファミリーのジェスチャーの意味に気付けなくておろおろしていると笑顔でこうだよって手を引いてやるべきことを教えてくださって、本当に何があっても笑顔を絶やさないその暖かい人間性に魅力を感じずにはいられなかった。また、シャンティ寮の子供たちも、ホイプム村の皆さんもご飯は食べる皆で

手作りで用意して孤食が問題視されている日本とは違って本当に楽しそうに皆笑顔で食べていた。チェンラーイ・ラパチャット大学で患者の増加問題と食事の関係について個人的にプレゼンさせて頂いたのだが、シャンティ寮やホイプム村で皆でそろって楽しそうにご飯を食べている光景を見ると、楽しくご飯を食べることが心にも栄養となって、物理的にだけでなく心の状態も満腹にしてくれるのだなと改めて感じた。そしてそのことがまた、生活習慣によってもたらされる病気も抑制しているのだと感じた。日本も資本主義社会の構造に取り込まれて仕事や学業に追われることをやめて、もっと身近な人とのんびりと交流する時間を大切にしていけるような社会構造を作ることができればもっと晴れやかな笑顔を見せる人が増えるのかもしれないと感じた。物質的に豊かであっても心が幸せを感じられていないのならそれは経済的に恵まれないことよりももっと嘆くべきことである。

また、佐伯さんからシャンティ山口がホイプム村の方々のために設置したエコトイレのお話を伺い、日本のトイレは使い心地が良くて衛生的にも良くてどこのトイレにも引けをとらないだろうと思っていたが、作りに無駄が本当に多いと気付かされた。エコトイレの浄化の仕組みは、タンクの中で微生物に糞尿を処理させて、タンクの真ん中部分の水が一番きれいだからそれを何回もタンクを通して浄化していくという簡潔な仕組みである。そこで得た水は飲み水にもできるほど水質もよく、また浄化途中に発生したメタンガスによって火も起こせる。この浄化システムを設置できるだけの土地があれば、浄化に特別な機械が必要とされるわけでもなく、電力もいらないし、糞尿を流すにも流すのに必要なだけの水があれば大丈夫だ。資源をとことん大切に使えるトイレであるので日本で消費電力が少なくて環境に優しいトイレだと宣伝されているトイレよりも断然環境に優しい。うってかわって日本のトイレは浄化システムを複雑にすることでたくさんの企業が関与し利益を得られるようにしているのだろう。糞尿を流すにも明らかに必要以上の水を流してしまっているし、近づいたら自動で便座が開くシステムなども電力を無駄に使っていると思うし、何しろ無駄が多い。そのうえ、複雑な仕組みゆえ脆くてすぐに不具合が生じてしまうし、そこでまた業者が関与してお金儲けに絡んでいく。日本はものを大切に使うということよりも、いかに経済を回すかということにばかり焦点があてられて商品やシステムが作られているかということを認識させられた。

物質的に豊かな環境に居続けると、自分の身の回りにこんなにも資源を無駄にしていたシステムがあったことにも気付けずにいた。本当にこのツアーに参加できたことを感謝しなければいけない。このツアーに携わってくださった皆さんにも本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

[エコトイレの浄化設備]

[シャンティ寮のみなさんと]

— 黒田琴巳 —

～使ったものやゴミの処理の仕方、持続可能なものの使い方～

徳島大学　医学部医科栄養学科　１年　中井咲希

私は今回、タイのスタディーツアーに参加させて頂いた。そのツアーの中で、NGO のシャンティ山口が支援をしているホイプム村に三泊四日でホームステイをさせて頂いた。

村では、ペットボトルやプラスチック製品、さらにはテレビやスマートフォンなども散見され、私が想像していた以上に、現代的なものがあった。

ご飯を持ち歩く際には、お弁当箱に入れるのではなく、ご飯やおかずを種類ごとに分けてビニール袋の中に入れていた。そして、食器とスプーンと果物の皮を剥く包丁を持って来て食べていた。残飯や生ゴミは山に捨てていたが、食べ物は自然に分解されるので、何も問題は感じなかった。しかし、分解されないペットボトルやプラスチック類のゴミも同じ感覚で山に捨てていたことが気になった。

そもそも、山に住んでいる人数もそれ程多くなく、山も広いので、山がプラスチックゴミで溢れかえることがあったとしても、遠い未来の話だろう。それでも、ゴミが多くなり、有害物質が出る前に、今後はプラスチックゴミを山に直接捨てるのではなく、定期的に拾い集めて街の方で売却すれば、将来ゴミで溢れることはないだろうと思った。佐伯さんの話によると、既に、プラスチックゴミを街で売却しているそうで、実際家の中ではプラスチックゴミを集めるスペースも見受けられたが、家周辺以外の山道や、外の農作業の休憩所周辺のゴミに関しては、長い間放置されている印象を受けた。

プラスチックゴミが出るものの、ペットボトルは一度空になったものに再度水を入れ、水筒の代わりにしてから捨てていた。食事のときに使ったプラスチックのお椀も使い捨てはせず、もう一度洗って何回か使うようにしていた。プラスチックゴミではないが、持ち手が折れた傘を山に登る杖として活用していた。この様にモン族の方々は、私たち日本人が使い捨てにしているものも、再利用しており、ゴミの量も最小限だった。このことから、いかに日本人が「もったいない」の精神を忘れ、多くのものを使い捨てにしているかということに気づいた。

石鹸だけでなく、洗剤やシャンプーもあり、特にお風呂場から流れるシャンプーを含んだ水はそのまま山に流れていたことも気になった。しかし、日本の下水処理場でも洗剤やシャンプーなどの合成界面活性剤は生分解されないため、川や海にそのまま流れているのが現状であり、下水処理の設備が整っていても結局は自然界に放置している。この事実に目を向けると、ゴミの処理の仕方よりも、一度生活用品の一つになってしまった人工物を使う機会や量をいかに減らすかについて再考し、工夫することが重要だという考えに行きついた。

また、日本では最近、し尿が主な発生源である窒素やリンを川や海の富栄養化を防止するために、下水処理場で、高度処理施設を導入しているそうだが、その分コストも高い。この点に関して、ホイプム村のエコトイレは、し尿も自然に分解出来るため、無駄なコストもかからず、非常に効率的だと感じた。

食事は、食べる人数分より少し多めの量を毎回作っており、残った分を次の食事に出して、ほとんど食べ物を捨てていなかった。おかずも毎回２品、多くて３品程度だったので、調理も一日に２回程度だった。食材は村で取れたと思われるものもあったが、街で買ったと思われるものもあり、それを使った後は、必ずゴミが出ていた。テーブルや椅子、台所などはすべて木や石など自然界にあるもので作られていた。村の物の多くは、生分解されるもので構成されていた。

夜はあまり電気を使わないようにするため、暗くなる前に水浴びを済ませ、暗くなるとご飯と就寝の準備をして、すぐに寝ていた。家にはバッテリーが置いてあり、テレビを見るのも夜寝る前の３０分程度だった。水浴びは、大きいバケツに予め１分間水を貯め、その貯めた水で一人分の水浴びをしていた。シャワーだと、何分間も流してしまい、知らず知らずのうちに、大量の水を消費していることがあるが、予めバケツに貯めておくと、貴重な水を無駄使いすることなく使えると思った。

この様にホイプム村の方々は、限られた資源を無駄なく、効率的に使っていた。今でこそ、村の人もゴミを出しているが、その原因は街で買った物やその入れ物であり、村のものだけで暮らしていたならば、ほぼ生分解されるため、ゴミとして半永久的に残る物はほとんどなかっただろう。また、彼らは時間に追われることなく、心穏やかに生活しており、私も滞在中は「忙しい」という概念を忘れ、自然と共生するとはどういうことかを学べた貴重な体験だった。私たち日本人は、リサイクル率は世界トップクラスであるものの、毎日一人当たり１ｋｇのゴミを排出していることからも分かる様に、資源を大量消費する習慣が身についている。このことからも、リサイクルに力を入れるよりもまず、ゴミを減らすことを意識するべきだ。また、便利なものが開発され、暮らしは豊かになったが、その反面、日本人の忙しさは加速され、常に時間に捕らわれている。物質的な豊かさはあっても、精神的な豊かさとゆとりを失いつつあることにも気づいた。あまりに発達した文化の中で暮らしている人間だけが、自然な人間の暮らしからかけ離れ、不自然なものを大量に産み出していた。不自然なものをいかに自然なものにするか、もしくはより環境に負荷がかからないものにするかが、今後の課題だと思った。他国の生活を体験することで、他国の長所や短所だけでなく、自国の長所や短所も分かり、自国に対する理解も深まった。それと同時に、他の多くの国にも行きたいと思った。そうすることで、日本にいては見えない日本の側面をもっと知れると思ったからだ。

最後に、この貴重な機会を与えて下さった方々に、心から感謝します。

▲ホイプム村の山道

▲ホイプム村の台所

― 中井咲希 ―

～ ホイプム村とシャンティ寮を訪ねて ～

シニア学生　　池田　幸

３０年前、海外旅行に初めて行きました。目的は当時、支援していたフィリピンの小さな集落にホームステイする為でした。そこは波打ち際の海の上に竹で組まれた家が何軒かある集落でした。
すぐ横の砂浜には棺桶状のコンクリートの墓が団地のように積まれていました。子ども達がそのお墓で遊んでいました。

そして３０年経った２０１５年夏にホイプム村にやって来たのです。今回一緒に訪れた学生と同世代の頃に経験したフィリピン、そして母親となり子育てを終えつつある年齢で訪れたホイプム村。
太陽の日の出とともに１日が始まり日没とともに１日が終わる。人間の本来の生活の姿だと若かりし３０年前には感じなかった事を今回、実感しました。
もうひとつ子育てを終えた今だからこそ気づいた事が子どもの発達に何が重要なのか？という事

私がこのような思いに至ったホイプム村での光景

●小さな子ども達（２歳～４歳）がもちろん舗装されていない石がゴロゴロの坂道を小さな足,
しかも裸足で保育園から帰宅している姿。

●まだまだヨチヨチ歩きのステイ先の１歳２か月の女の子、家へと続く４５度もありそうな急こう配の上り坂をバランスをとり足を踏ん張りゆっくり上がっていく姿。
●充分な照明のない家で（当然ながら絵本など見えない）１８歳の若い父親は自作？物語を口ずさで子どもを寝かしつけている微笑ましい姿。
●村の大人たち皆が子ども達に注意をはらい声をかけている姿。

残念ながらどの光景も日本では（地方でも）見ることができなくなりました。

ホイプム村訪問前に訪れたシャンティ寮の子ども達が元気に明るく素直に育っている事、そして学習ができる環境が与えられた時、能力を十分に発揮できるのも村のゆったり流れる時間のなかで手足をしっかり使い、しっかり睡眠をとり、村の大人たちの愛情をたっぷり受けることの出来る環境の中で育ったからだと気づきました。

今、日本ではデジタル機器に夢中になり幼いわが子の様子をよく見ていない両親、スマートホンに子守をさせる親、就寝時間の遅い子どもが増えています。

私が関わっている小さな町（徳島のホイプム村？と思うほどの山の中なのです）で町の保健師と協力して子どもが健やかに成長するには何が大切で、本当に必要なものは？というプロジェクトを始めています。溢れるほど多くの情報に振り回される両親に、今回の訪問で気づき学んだことが大いに役立ちそうです。

最後にホイプム村で２１時に就寝し４時には自然に目覚める生活、日本ではあり得ない早寝早起き生活でしたが滞在中とても体調がよく、大人の身体にも良いことなんだろうなあと痛感しました。

― 池田　幸 ―

寮生達との農作業体験

シャンティ学生寮　“お互いに元気で頑張ろうね！”　　2015.9.28.saeki